様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１７１３

研究課題名（和文）小中学校において実施可能な体系化された安全・防犯教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of a systematic safety and crime prevention education curriculum that can be implemented in elementary and junior high schools

研究代表者
岸　俊行（Kishi, Toshiyuki）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授

研究者番号：１０４５４０８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、水難事故防止，サイバー犯罪防止，万引き防止の３つの領域における安全教育の実現を目指したカリキュラム開発・および実践・効果測定を行ってきた。サイバー犯罪防止教育、万引き防止教育に関しては、それぞれ一般化を目指した教材開発を行い、その開発した教材に基づいた実践教育の実施を行った。また水難事故防止教育では、より実践的な教育カリキュラムの開発を行い、実践を通したリスク認知の一般化に関する検討を行った。これら一連の研究により、開発した教材やカリキュラムによる教育分野での実践及び効果は一定程度認められたが、リスク認知の一般化に関しては今後の検討が必要であるという結果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子どもが巻き込まれる災害や犯罪は、年を追うごとに増加している傾向がある昨今、本研究で志向した安全・防犯教育に資するカリキュラム開発は子どもの命を直接的に守る研究であるといえる。その点において本研究課題は非常に大きな意義を有する。さらに安全・防犯教育は社会の根幹をなすものでもあり、教育現場における安全・防犯教育カリキュラムの開発は巨視的には持続可能な社会の実現に資するものに繋がるものでもある。初等中等教育の段階で「自分の身を自分で守る」方略を学んだ子どもたちが大人になった際に、次世代の子どもたちへと学んだことを伝える事によって、危険・脅威への対処方略の世代間継承が期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have undertaken curriculum development, implementation, and effectiveness assessment to promote safety education across three subjects: water accident prevention, cybercrime prevention, and shoplifting prevention. In the case of cybercrime prevention and shoplifting prevention education, we have devised comprehensive teaching materials and carried out practical instruction based on the developed materials. As for water accident prevention education, we have developed a more hands-on educational curriculum and explored the applicability of risk perception through practical exercises. Through this series of investigations, we have observed that the developed educational materials and curriculum exhibit a certain degree of effectiveness and practicality in the educational field. However, further research is required to establish the generalizability of risk perception.

研究分野：教育工学

キーワード：安全教育　防犯教育　カリキュラム開発　サイバー犯罪防止教育　万引き防止教育　水難事故防止教育　実践教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究課題に関連した開始当初の特筆すべき状況として、以下が挙げられる。

まず一つとして、小中学校段階の子どもが危険にさらされる報道が多くなされているという点である。いじめや虐待事案の認知件数は減ることなくあり、万引きや窃盗などの犯罪に関わる少年事件も法改正や行政的な支援の見直し、防犯教育などの実施により横ばい状態ではあるが依然として一定数存在していた。また、インターネットや SNS の急速な進展により、ネット犯罪に巻き込まれる子どもの数も右肩上がりの状態であった。さらに毎年、夏には子どもが巻き込まれる水難事故が多く報告されており、大規模な地震や日本列島に上陸する大型台風など自然災害の増加などで被災する子どもも非常に多くなっているという状況であった。

このような状況を背景に、学校現場においても安全・防犯という観点から、危険回避にかかわる教育実践はなされていた。しかし、これらの安全・防犯教育には以下の大きな２つの問題を内包していた。第一に、一つ一つの教育プログラムが独立に存在しており、体系化されていないという点である。各分野の専門家が学校現場に赴き安全教育を実践する事例が多くみられるが、専門分野に特化した内容に終始しており一般化されていないのが現状であった。例えば、稲垣ら（2016）は水難事故防止教育を実際の学校現場で行っているが、水難事故防止に特化した教育プログラムであり、鶴田ら（2018）はネット犯罪防止に関する実践プログラムの立案を行っているが、サイバー空間における危険認知に特化しているという特徴がある。更に、このような単発的な教育実践では 1 回の実践の後の事後フォロー（教育）がなされることが少ないのも現状であった。第二に、理論的な研究や効果測定といった研究的なアプローチがほとんど行われていないという点である。学校現場で行われている多くの実践は、実際の子どもが被害にあった事例に基づいて行われるものが多く、研究的なアプローチが非常に少ないというのが特徴であった。安全教育を行った結果として、子どもたちの内部にどのような変化が生じ、それが子どもたち自身の獲得した能力として定着しているのかどうかの検討等の研究的アプローチがほとんど行われていないという現状であった。

このように研究開始当初の子どもに対する安全・防犯教育に関しては、個々の教員の試行錯誤で行われているものが多く、また現実的に脅威となっているテーマ（事案）について対症療法的に行っている実践が殆どであった。しかし子どもたちが遭遇する可能性のある脅威は非常に多岐にわたっており、全ての脅威について学ぶことは不可能である。社会的に重要になってきた脅威に対してその都度、安全教育を実施するような「もぐらたたき」的実践では、新たな脅威に遭遇した際に対応できるという保証もない。そのような状況を背景に本研究では、一般化・体系化された安全教育を実施するための基礎的研究として研究の計画・立案を行った。

２．研究の目的

本研究では、子どもたちが自分の力で自分の身を守る能力・技能を身に着けるための体系的な安全・防犯教育カリキュラムを開発すること、小学校・中学校現場で長期的に実践を行うこと、その教育カリキュラムの評価を行うことの 3 点を目的とした。

体系的な安全・防犯教育カリキュラムを開発するにあたり、本研究では安全教育のプロトタイプとして「水難事故防止教育」「サイバー犯罪防止教育」の 2 つを、防犯教育のプロトタイプとして「万引き防止教育」を設定し、様々な領域の安全教育・防犯教育に携わる専門家と地域の警察・消防・自治会等のステークホルダーと協働による相互実践を行うことによって、安全・防犯教育プログラムの体系化を目指す。なお本研究において「水難事故防止教育」「サイバー犯罪防止教育」「万引き防止教育」の 3 つをプロトタイプとしたのは、以下の理由からである。これらは安全教育の 3 領域のうちの「生活安全」と「災害安全」に係るものであり、どちらの内容も小中学生の子ども全てが対象となりうる事案である点を考慮したからである。特に万引きに関しては、低年齢の子どもが犯しやすい犯罪類型であり犯罪の低年齢化が指摘されている現在、犯罪抑止教育の端緒として万引き防止教育を実践することが非常に重要であると判断したからである。また、サイバー犯罪防止教育に関しては、近年のネットワーク技術の進展とモバイル端末利用の気軽さから、年々、新たな脅威が現出する状況の中で、いかに未知の危険に対処するのかを学習するのにふさわしい内容と判断したからである。

３．研究の方法

本研究では、水難事故防止教育、サイバー犯罪防止教育、万引き防止教育の３つの領域に関して体系化可能な安全・防犯教育カリキュラムの開発およびそれに基づく教育実践を行うことを目的とした。

（１）水難事故防止教育

水難事故防止教育に関連して、本研究課題では研究１年目・2 年目に岐阜県中津川市の中学１年生を対象に、実際の河川での実践授業を行った。本実践では，従来の水難事故防止教育ではほとんど行われてこなかった自然水域において実践を行うことが特徴である．そのため他職

種・他領域の専門家と協働で実践を行った．具体的には，中学校教員 3 名，消防署員 7 名，専門の異なる大学の研究者 3 名がそれぞれの専門の立場から実践に関わった．2 年とも実践授業の内容として，以下の3つを体験することを計画した．すなわち，1.河川水難原因の4要素（水深・水温・河床・流速）の体感，2.水難事故への対処法，3.水難事故における救助法である．河川水難原因の体感として「中洲への移動・歩行」，水難事故への対処法として「フローティングポジション」「流水での姿勢」，水難事故における救助法として「スローバック」「ヒューマンチェーン」をそれぞれ体験する実践を計画した．

また実践授業の効果およびリスク認知の一般化を検討するため、実践授業の前後および 5 か月後の 3 時点での質問紙調査を行った。水難事故に対する認識変化に関しては「水域に対するリスク認識」尺度を、リスク認知の一般化に関してはリスク受容尺度（SRA）とリスクテイキング尺度（RPQ）を用いた。

（２）サイバー犯罪防止教育

サイバー犯罪防止を行うために、本研究では以下の２つを行った。

第１に、本研究の 1 年目及び 2 年目にサイバー犯罪防止に資するための教育教材の作成を行った。具体的には、福井県警察本部と協力のもと、福井県内の中高生を対象としたネット犯罪等に関する経験事例および知識の有無に関する質問紙調査を行った。それらの基礎調査に基づき、教材の作成を行った。第２に、本研究の 3 年目に実際に作成した教材を用いた中高生を対象としたサイバー犯罪防止教育の実践を行い、作成した教材及びそれに基づいたカリキュラムの効果を検証した。実際に福井県内の中学校 4 校を対象に、本研究課題により作成及び考案したカリキュラムの授業単元の実施を行った。授業単元は５回の授業で構成されるものであった。また、カリキュラムの効果を検証するために、授業の前後における質問紙調査を行った。

（３）万引き防止教育

以下の３つのフェーズで研究を行った。

第１フェーズとして、研究 1 年目および 2 年目には危険な場所の抽出・マッピング、およびそこでの事件の態様等に関するデータベース化である。データベース化を行うために、香川県警察および万引きが多い書店関係者、一般市民、学生等による質問紙調査を行い、地図上でのマッピングを行った。引き続き第２フェーズとして、第 1 フェーズで作成したデータベースに基づき、地図と連動した万引き防犯に資するアプリ「歩いてミイマイ」の開発を行った。また実際に制作した「歩いてミイマイ」の評価を行うための実践を行った。研究 3 年目には第３フェーズとして、フェーズ２で作成したアプリを用いて、青少年，保護者，高齢者，社会人を対象とした教育プログラムの策定・実践を行った。青少年向けプログラムには，中学生 240 名が参加した。保護者向けプログラムには，青少年の子をもつ保護者 115 名が参加した。高齢者向けプログラムには，高齢者 80 名が参加した。社会人向けプログラムには社会人 48 名と大学生 38 名の計 86 名が参加した。また参加者には、①プログラムの印象，②万引きに関する実感，③万引きに対する態度のそれぞれ３つの質問紙調査を併せて行った。

４．研究成果

本研究課題においては、先述した通り水難事故防止、サイバー犯罪防止、万引き防止の 3 つの領域における教材開発及びそれに基づく実践・効果測定を行ってきた。紙幅の都合上、水難事故防止教育および万引き防止教育における研究成果の概要を以下に記す。

（１）水難事故防止教育

①　水難事故防止に関する認識への影響

実際の河川での着衣泳の実践が生徒の認知にどのような影響を及ぼしたのかを検討するため，水域に対するリスク認識項目 6 項目を従属変数に，調査時期を独立変数とした対応のある分散分析を行った（Table1）．その結果，6 項目中全ての項目で時期による有意な認識の変化が見られた．Turkey 法によるその後の検定の結果，全ての項目において事前の調査よりも直後の調査で水域に対するリスク認識が高まっていることが明らかとなった．さらに着衣状態での入水の

Table 1 Comparison of risk awareness for water areas among three time points (repeated measure analysis of variance)

	N	Pre		Post1		Post2			
		M	SD	M	SD	M	SD	F	η^2
Do you think you or your friends will have a drowning accident?	41	3.80	1.08	4.32	0.88	4.32	0.99	7.93**	0.17
Do you think you will have a drowning accident in a deep place where you can't touch the bottom with your feet?	41	4.49	0.90	4.80	0.51	4.73	0.55	3.42*	0.08
Do you think you will have a drowning accident when the water is cold?	41	4.12	0.90	4.61	0.74	4.41	1.02	6.37**	0.14
Do you think you will have a drowning accident where the bottom is too rough or slippery?	41	4.20	1.01	4.76	0.58	4.61	0.67	8.40*	0.17
Do you think you will have a drowning accident in the flowing water?	41	3.98	1.17	4.68	0.72	4.51	0.78	11.92**	0.23
Do you think you will have a drowning accident if you go into the water with your clothes on?	41	4.24	0.88	4.61	0.77	4.34	0.94	4.83*	0.11

**: $p < 0.01$ *: $p < 0.05$

危険性以外の 5 項目に関しては，実践直後のリスク認識が 5 か月後まで維持されていることが明らかとなった．着衣状態での入水の危険性のみ実践直後に高まったリスク認識が 5 か月後には事前の水準にまで下がるという結果であった．この結果は，実践の際にライフジャケットを着て行ったこと，前日までの降雨の影響で川が増水し危険な状態での実施だったために生徒が実践をこなすことに必死だったこと等が理由として考えられる．ほとんどの生徒はライフジャケットの着用は初めてであり，観察した際にも実際に川の中に入り浮くという体験に多くの生徒が驚きの声を漏らしていた．実践後の振り返りでも「流れが速くて怖かったが，ライフジャケットを着たことで浮いて気持ちよかった」というようにライフジャケットに言及していた子どももいた．また流速の速い川の中で必死に実践していたため，着衣状態での危険を感じる余裕がなかったことも理由として推察される．実践後の振り返りでも「川の流れがビックリするぐらい早くて，ひたすら川の中を移動することだけで精一杯だった」という感想も見られた．このような普段と違う環境・状況の中で行われた実践だったため，実践直後には着衣状態での危険を感じられたとしても，水の深さや冷たさ，川の深さ等の実践経験が強烈であり，5 か月後には着衣に関する感覚は忘れられたと推察される．しかし，生徒にとって印象が強烈であったと推察される点に関しては，リスク認識が５か月後まで持続することも示唆された．

②一般的な安全意識に与える影響

次に SRA の 5 因子および RPQ の 4 因子を従属変数に，調査時期を独立変数とした対応のある分散分析を行った（Table2）．SRA においては「慎重さ」因子に時期による有意な変化が認められたため，Turkey 法によるその後の検定を行った．その結果，「慎重さ」は実践直後よりも 5 か月後のほうが有意に低いという結果であった．RPQ においては「状況的敢行性」因子に時期による有意な変化が認められたため，Turkey 法によるその後の検定を行った．その結果，実践直後より 5 か月後のほうが「状況的敢行性」は高いという結果であった．状況的敢行性は「夜，無点灯で自転車に乗る」や「歩行時，赤信号でも車が来なければ渡る」というような項目で構成されており，状況によってはリスクが生じる行動でも選択するという因子である．SRA での「慎重さ」因子，RPQ 因子での「状況的敢行性」因子はどちらも，実践直後には実践による危険認知の影響が見られたが（より慎重な行動を選択する傾向，リスクの生じる行動を避ける傾向），5 か月後にはそれらの影響が見られなくなるという結果であった．SRA の他 4 因子（「無謀さ」「チャレンジング」「安全第一」「運命」），RPQ の他 3 因子（「ギャンブル志向性」「確信的敢行性」「安全性配慮」）においては，本実践の影響は見られなかった．実践日は前日の大雨の影響で実施が危ぶまれるほど河川が増水した中で行われたため，実践前に行われた消防署員の説明においても「川の中に入ったら慎重に行動を行う事」，「自然の状況は突然変化するため，我々（消防署員）も真剣に状況の判断をして皆さんの安全を守るが，皆さん自身も周囲の環境や状況を見て，自分の身はしっかりと守れるようにすること」という内容の話が強調された．そのため実践直後には，消防署員の講話内容に直結していた「慎重さ」因子と「状況的敢行性」因子のみ影響を受けたと推察できる．しかし 5 か月後には有意に減少しているため，この 2 因子に関しては実践の効果の持続性は認められなかった．以上の結果より，自然水域を利用した実践授業おける影響は，水域に関する項目に関しては十分に直後及び持続効果は認められるが，一般的なリスク受容やリスクテイキング傾向に関しては，特別に直前に意識づけられた内容以外には効果が認められないことが示唆された．

Table2 Comparison of the SRA and PPQ at three time points (repeated measure analysis of variance)

		N	Pre		Post1		Post2			
			M	SD	M	SD	M	SD	F	η^2
SRA	Prudence (ICC(1,3) = 0.77, CI = 0.62~0.87, $p < 0.05$)	44	6.36	1.66	6.73	1.68	6.02	2.17	3.35**	0.07
	Recklessness (ICC(1,3) = 0.79, CI = 0.65~0.88, $p < 0.05$)	43	3.79	1.75	3.35	1.95	3.74	2.12	1.49	0.03
	Challenging (ICC(1,3) = 0.78, CI = 0.64~0.88, $p < 0.05$)	42	6.38	1.94	6.24	2.14	6.17	2.08	2.61	0.01
	Safety First (ICC(1,3) = 0.77, CI = 0.61~0.87, $p < 0.05$)	42	5.79	1.85	6.17	1.68	5.69	1.72	1.81	0.04
	Fate (ICC(1,3) = 0.74, CI = 0.56~0.85, $p < 0.05$)	44	6.59	1.70	6.80	1.71	6.98	1.96	0.99	0.02
RPQ	Gambling Orientation (ICC(1,3) = 0.76, CI = 0.59~0.86, $p < 0.05$)	43	10.12	2.44	9.93	3.25	10.14	2.88	0.14	0.003
	Situational Behavior (ICC(1,3) = 0.79, CI = 0.65~0.88, $p < 0.05$)	43	10.77	3.17	10.70	2.84	11.37	3.20	4.31**	0.09
	Confident Behavior (ICC(1,3) = 0.76, CI = 0.60~0.86, $p < 0.05$)	44	4.66	1.57	4.34	1.74	4.80	1.82	1.67	0.04
	Safety Consideration (ICC(1,3) = 0.83, CI = 0.73~0.90, $p < 0.05$)	44	9.80	3.19	9.93	3.14	9.98	3.14	0.11	0.002

**: $p < 0.01$ *: $p < 0.05$

（２）万引き防止教育

青少年向け，保護者向け，高齢者向け，社会人向けの教育プログラムの参加者のデータを併せて，各尺度に対する因子分析（最小二乗法）を行った。

①プログラム全体の印象：プログラム全体の印象を尋ねる４項目について因子分析を行ったところ１因子が抽出された。４項目の合計得点を「肯定的評価」得点とした。

②万引きに関する実感：万引きに関する実感を尋ねる７項目について因子分析を行ったところ，１因子が抽出された。７項目の合計得点を「万引きに関する実感」得点とした。

③万引きに対する態度：万引きに対する態度を尋ねる９項目について因子分析を行った。３因子を指定して分析を行ったところ，解釈可能な因子パターンを示したため３因子解を採用した。第１因子は「万引きに関する情報探索」因子，第２因子は「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」因子，第３因子は「地域づくりへの意欲」因子とした。それぞれ３項目ずつの合計得点を「万引きに関する情報探索」得点（α＝.83)，「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」得点（α＝.78)，「地域づくりへの意欲」得点（α＝.72）とした。

④プログラム間の比較

肯定的評価，万引きに関する実感，万引きに対する態度について，プログラム間の比較を行った。それぞれの平均値について，プログラムを独立変数とする分散分析を行った。プログラムの効果が有意であった場合の多重比較には，Tukey 法（p＜.05）を用いた。

肯定的評価　肯定的評価については，プログラム間で有意な差があった（F（3,444）＝15.62，p＜.001，η2＝.10)。多重比較の結果，高齢者向けが青少年向け，保護者向け，社会人向けよりも高かった。万引きに関する実感　万引きに関する実感については，プログラム間で有意な差はなかった（F（3,437）＝2.57，n.s.，η2＝.02)。万引きに対する態度　万引きに関する情報探索については，プログラム間で有意な差がみられ（F（3,437）＝3.28，p＜.05，η2＝.02)，高齢者向けが青少年向けより高かった。万引きをした（しそうな）人へのかかわりについては，プログラム間で有意な差はなかった（F（3,442）＝0.36，n.s.，η2＝.00)。地域づくりへの意欲については，プログラム間で有意な差がみられ（F（3,442）＝5.47，p＜.01，η2＝.04)，高齢者向けが青少年向け，保護者向け，社会人向けより高かった。

⑤肯定的評価，万引きに関する実感，万引きに対する態度の関連

本研究で測定した変数間の関連について，万引きに関する実感の強さが肯定評価を介して，万引きに対する態度に影響するモデルを想定した。Figure1 のモデルについて，４つのプログラムの参加者それぞれの母集団を想定する多母集団同時分析を行った。分析には，各尺度の得点を観測変数として用い，パラメータの推定は最尤推定法によって行った。推定によって得られた変数間のパス係数について，プログラム間での比較を行った。すべてのパス係数と共分散に等値制約を置かないモデルについて，AIC は 160.00 であった。飽和モデルであるため，その他の適合度は算出されない。また，すべてのパス係数と共分散に等値制約を置くモデルの AIC は 177.942 であり，等値制約のないモデルの値より大きかった。万引きに関する実感から肯定的評価に対するパスは，すべてのプログラムで有意であり，社会人編が青少年編と高齢者編より大きかった。万引きに関する実感から万引きに関する情報探索に対するパスもすべてのプログラムで有意であり，青少年編が保護者編より大きかった。万引きに関する実感から万引きをした（しそうな）人へのかかわりに対するパスは，青少年編と保護者編で有意であり，青少年編が保護者編と社会人編より大きく，高齢者編が社会人編より大きかった。万引きに関する実感から地域づくりへの意欲に対するパスは，青少年編と保護者編で有意であり，青少年編と保護者編が高齢者編より大きかった。肯定的評価から万引きに関する情報探索に対するパスは，社会人編以外で有意であった。しかし，プログラム間でパスの値に有意な差はなかった。肯定的評価から万引きをした（しそうな）人へのかかわりに対するパスは，いずれのプログラムでも有意ではなく，プログラム間での差もみられなかった。肯定的評価から地域づくりへの意欲に対するパスは，青少年編においてのみ有意であったが，プログラム間で有意な差はみられなかった。

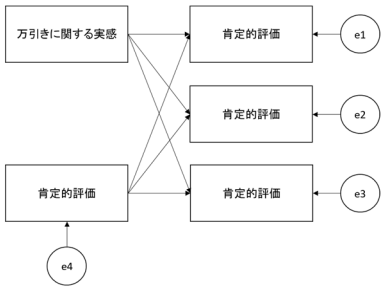

Figure1 万引きに関する実感、肯定的評価、万引きに対する態度の関連についてのパスモデル

（３）研究総括

本研究では、水難事故防止，サイバー犯罪防止，万引き防止の３つの領域における安全教育の実現を目指したカリキュラム開発・および実践・効果測定を行ってきた。サイバー犯罪防止教育、万引き防止教育に関しては、それぞれ一般化を目指した教材開発を行い、その開発した教材に基づいた実践教育の実施を行った。また水難事故防止教育では、より実践的な教育カリキュラムの開発を行い、実践を通したリスク認知の一般化に関する検討を行った。これら一連の研究により、開発した教材やカリキュラムによる教育分野での実践及び効果は一定程度認められたが、リスク認知の一般化に関しては今後の検討が必要であるという結果であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計62件（うち査読付論文　22件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Kishi Toshiyuki、Ohnishi Masafumi、Inagaki Ryousuke	４．巻 10
２．論文標題 Assessing the effectiveness of a water safety program for junior high school students in Japan	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Cogent Education	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/2331186X.2023.2205810	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大久保 智生、徳岡 大	４．巻 33
２．論文標題 ホスピタリティに着目したセルフレジ不正対策 ―セルフレジサポーター導入による効果の検証―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 HOSPITALITY：日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌	６．最初と最後の頁 25～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57467/jashj.33.0_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大久保，智生，皿谷，陽子	４．巻 8
２．論文標題 エコバッグを用いた万引きの現状と対策の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大久保 智生，鈴木 修斗，藤田 然吏，藤本 健太，西本 佳代，永冨 太一，堀江 良英，有吉 徳洋	４．巻 46
２．論文標題 防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動の改善と効果検証	５．発行年 2023年
３．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	６．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，皿谷 陽子	4．巻 8
2．論文標題 Current situation and its countermeasures against shoplifting via eco-bags following the introduction of a chargeable plastic bags	5．発行年 2022年
3．雑誌名 International Journal of Japan Academic Society of Hospitality Management	6．最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，鈴木 修斗	4．巻 57（9）
2．論文標題 特集 交通安全アプリ開発へのニーズと交通安全意識、交通行動の関連	5．発行年 2022年
3．雑誌名 交通安全教育	6．最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古村 健太郎，澤邉 潤，木村 裕斗，鶴田 利郎，三和 秀平	4．巻 9
2．論文標題 社会的インパクトを創出するためのアイデアが産み出され、実践される過程	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域未来創生センタージャーナル	6．最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古舘 卓也，窪田 聡，鶴田 利郎，篠崎 雅江	4．巻 25（1）
2．論文標題 見学実習の体験がジェネリックスキルに及ぼす影響	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本作業療法研究学会雑誌	6．最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 285
2．論文標題 中学校・高等学校におけるゲーム障害・インターネット依存について考える教育	5．発行年 2022年
3．雑誌名 学習情報研究	6．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 53
2．論文標題 中学校・高等学校における継続的なインターネット依存・ゲーム障害の予防教育の授業実践	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コンピュータ＆エデュケーション	6．最初と最後の頁 82～85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14949/konpyutariyoukyouiku.53.82	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 291
2．論文標題 インターネット依存・ゲーム障害の予防教育におけるメディア・リテラシーの育成	5．発行年 2023年
3．雑誌名 学習情報研究	6．最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江田 廉，稲垣 良介	4．巻 7
2．論文標題 「着衣のまま水に落ちた場合の対処」の授業が児童の水難時の行動選択及び行動意図に及ぼす影響	5．発行年 2022年
3．雑誌名 子ども安全研究	6．最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介，松本 貴行，吉川 優子	4．巻 7
2．論文標題 保護者に対する「水辺の活動に関するアンケート調査」報告 ： 学校水泳の内容及びライフジャケット教育に着目して	5．発行年 2022年
3．雑誌名 子ども安全研究	6．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都築 麗緒奈，稲垣 良介	4．巻 7
2．論文標題 子どもの水辺安全に関する学生の学び ： 吉川優子さんのご講演を通して	5．発行年 2022年
3．雑誌名 子ども安全研究	6．最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介，岸 俊行	4．巻 67（3）
2．論文標題 プールにおける着衣泳指導が中学生の水難事故防止に関する意識に与える影響 ： 水遊び,ライフジャケットに対するイメージの変化より	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育医学	6．最初と最後の頁 151-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32311/jsehs.67.3_151	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡邉 泰典、稲垣 良介、森山 進一郎	4．巻 2022年度
2．論文標題 河川での水難における行動選択の違いが水難者の深部体温に及ぼす影響	5．発行年 2022年
3．雑誌名 2022年度日本水泳・水中運動学会年次大会論文集	6．最初と最後の頁 51-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保，智生，皿谷，陽子，西本，佳代，吉井，匡，高山，朝陽，田中，晶，髙島，知之，小野坂，裕美，吉見，晃裕	4．巻 17
2．論文標題 大学生による店舗での買い物支援とその教育効果	5．発行年 2020年
3．雑誌名 香川大学教育研究	6．最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shimada Takahito、Hira Shinji、Harada Akira、Kanemasa Yuji、Ohkubo Tomoo、Higuchi Masataka	4．巻 83
2．論文標題 Community Crime Prevention: Research and education through collaborating with practioners and utilizing open data.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Proceedings of the Annual Convention of the Japanese Psychological Association	6．最初と最後の頁 SS～037-SS-037
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/pacjpa.83.0_SS-037	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，金澤 潤一郎	4．巻 56
2．論文標題 小学生を対象とした万引き防止教育プログラムの開発 ： 法知識と認知行動に焦点を当てた教育の実践と効果の検証	5．発行年 2020年
3．雑誌名 研究助成論文集 / 明治安田こころの健康財団	6．最初と最後の頁 64-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，鈴木 修斗，岸 俊行，永冨 太一	4．巻 28
2．論文標題 サテライトセミナー参加者を対象とした防犯教育の実践:防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動の効果検証	5．発行年 2023年
3．雑誌名 香川大学地域人材共創センター研究報告	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西 将史，毎田（久保）遥香	4．巻 7
2．論文標題 幼児期及び児童期における向社会的行動の理由づけの発達 ―仮想場面を用いた友人への分与行動の分析―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6．最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西 将史，廣澤 愛子，大西 薫	4．巻 47
2．論文標題 保護者によるエデュケーショナル・マルトリートメントの生起・維持に 関与する要因と消失・改善に関与する要因の検討 ： ―福祉・医療・教育現場の専門家に対するインタビュー調査から得られた事例の質的分析―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 福井大学教育実践研究	6．最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古村 健太郎，澤邉 潤，木村 裕斗，鶴田 利郎，三和 秀平	4．巻 9
2．論文標題 社会的インパクトを創出するためのアイデアが産み出され、実践される過程	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域未来創生センタージャーナル	6．最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 53
2．論文標題 中学校・高等学校における継続的なインターネット依存・ゲーム障害の予防教育の授業実践	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コンピュータ&エデュケーション	6．最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 285
2．論文標題 中学校・高等学校におけるゲーム障害・インターネット依存について考える教育	5．発行年 2022年
3．雑誌名 学習情報研究	6．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 291
2．論文標題 インターネット依存・ゲーム障害の予防教育におけるメディア・リテラシーの育成	5．発行年 2023年
3．雑誌名 学習情報研究	6．最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介、岸 俊行、長谷川 晃一	4．巻 71
2．論文標題 河川での実習及び教室での水泳の事故防止の心得の授業の効果の検証	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集	6．最初と最後の頁 466～
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20693/jspehssconf.71.0_466	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介、岸 俊行	4．巻 66
2．論文標題 「水泳の事故防止の心得」の指導効果の検証 ：生徒の水難事故に対する認識の変化に着目して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育医学	6．最初と最後の頁 211～219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32311/jsehs.66.3_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介、岸 俊行	4．巻 37
2．論文標題 河川での水難事故防止学習が中学生の認識及び感情に及ぼす影響：	5．発行年 2021年
3．雑誌名 体育科教育学研究	6．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11243/jsppe.37.2_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介	4．巻 20(2)
2．論文標題 着衣のまま水に落ちた場合の対処の授業が児童の水難事故に対する認知に及ぼす影響	5．発行年 2021年
3．雑誌名 安全教育学研究	6．最初と最後の頁 31～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣 良介、岸 俊行	4．巻 67
2．論文標題 プールにおける着?泳指導が中学?の?難事故防?に関する意識に与える影響	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育医学	6．最初と最後の頁 151～161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32311/jsehs.67.3_151	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hirosawa Aiko、Ohnishi Masafumi、Sasahara Miku、Suzuki Shizuka、Oda Asami、Ayashiro Hatsuho、Matsuki Kenichi	4．巻 69
2．論文標題 University Student Volunteers in Elementary and Middle Schools:	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Japanese Journal of Educational Psychology	6．最初と最後の頁 187～203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/jjep.69.187	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西 将史，廣澤 愛子，笹原 未来，鈴木 静香，織田 安沙美，松木 健一	4．巻 21（5）
2．論文標題 教職志望大学生による特別な配慮が必要な児童生徒への支援活動に関する研究 ： 保護者の視点から捉えた支援対象児の行動特徴と支援効果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 595～607
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西 将史、大西 薫	4．巻 46
2．論文標題 エデュケーショナル・マルトリートメントに関する研究の概観 ―概念の定義に焦点を当てた検討―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 福井大学教育実践研究	6．最初と最後の頁 85～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西 薫、大西 将史	4．巻 54
2．論文標題 保育者がとらえる子どもへの不適切なかかわりに関する研究―同僚保育者の視点から―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要	6．最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金綱 知征、西野 泰代、戸田 有一、鶴田 利郎、羽鳥 晋	4．巻 63
2．論文標題 「いじめ免疫プログラム」の評価指標の開発と評価実践	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本教育心理学会総会発表論文集	6．最初と最後の頁 106～107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20587/pamjaep.63.0_106	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 282
2．論文標題 メディア・リテラシーと情報活用能力のこれから（情報活用能力のこれから）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 学習情報研究	6．最初と最後の頁 28～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田 有司、大久保 智生、半澤 礼之、鈴木 美樹江、Hou Yuejiang、浅井 継悟、都筑 学	4．巻 63
2．論文標題 学校適応はどのようにとらえられるのか（13）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本教育心理学会総会発表論文集	6．最初と最後の頁 104～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20587/pamjaep.63.0_104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生、加藤 弘通、尾崎 沙織、江村 早紀	4．巻 42
2．論文標題 教師の学級経営が児童の学級適応に及ぼす影響	5．発行年 2021年
3．雑誌名 心理科学	6．最初と最後の頁 20～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20789/jraps.42.1_20	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 皿谷 陽子，大久保 智生	4．巻 31
2．論文標題 店員教育がホスピタリティと防犯意識に及ぼす影響 ： 店内での万引き防止の取り組みについて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌	6．最初と最後の頁 79～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保，智生，西本，佳代，鷸，綾乃	4．巻 18
2．論文標題 大学生における生徒化心性および大学環境の認知と適応感との関連	5．発行年 2021年
3．雑誌名 香川大学教育研究	6．最初と最後の頁 113～126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保，智生，加藤，弘通，江村，早紀，大沼，泰枝	4．巻 42
2．論文標題 教師の受容的態度と学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響	5．発行年 2021年
3．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	6．最初と最後の頁 37～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，米谷 雄介	4．巻 56
2．論文標題 特集 交通安全ウォーキングアプリ「ヒヤリハットチェッカー」の開発	5．発行年 2021年
3．雑誌名 交通安全教育	6．最初と最後の頁 6～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，金澤 潤一郎	4．巻 69
2．論文標題 窃盗癖について考える ： 子どもの万引きの特徴と対応および課題（特集 発達特性としての「こだわり」と「くせ」を理解する）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育と医学	6．最初と最後の頁 518～524
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 広田 すみれ、大谷 華、大久保 智生、白川 真裕	4．巻 10
2．論文標題 大学生のオンラインの居場所を考える	5．発行年 2022年
3．雑誌名 環境心理学研究	6．最初と最後の頁 1～9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20703/jenvpsy.10.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，堀江 良英，松下 昌明，中村 友美，小野坂 裕美，有吉 徳洋	4．巻 27
2．論文標題 安全・安心まちづくり推進店舗認定事業の成果と課題 ： 店舗における地域と連携した万引き対策の試み	5．発行年 2022年
3．雑誌名 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告	6．最初と最後の頁 9～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生，鈴木 修斗，西本 秀右，米谷 雄介，岸 俊行	4．巻 27
2．論文標題 保護者における交通安全アプリのニーズと交通安全意識および交通行動の検討 ： ヒヤリハット登録アプリ開発推進のための調査から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告	6．最初と最後の頁 19～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子 泰之、大久保 智生、久保田 真巧、白松 賢、岡田 涼	4．巻 18
2．論文標題 犯罪不安と地域への愛着が防犯ボランティアの動機づけに与える影響 ： 防犯ボランティア10年以内群と防犯ボランティア11年以上群との比較	5．発行年 2022年
3．雑誌名 静岡大学教育研究 = Journal of Shizuoka University Education	6．最初と最後の頁 23～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028802	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保，智生，岡田，涼，時岡，晴美	4．巻 44
2．論文標題 一般市民を対象とした万引き防止教育プログラムの評価	5．発行年 2022年
3．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	6．最初と最後の頁 31～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岸俊行，大久保智生	4．巻 66
2．論文標題 “気がかりな子”の在籍する通常学級において一斉授業はどのような特徴を有するのか：“気がかりな子”－教師－他児童の三者の関わりの検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育医学	6．最初と最後の頁 130-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32311/jsehs.66.2_130	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣良介，岸俊行	4．巻 66
2．論文標題 「水泳の事故防止の心得」の指導効果の検証 ：生徒の水難事故に対する認識の変化に着目して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育医学	6．最初と最後の頁 211-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32311/jsehs.66.3_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生 ，米谷 雄介 ，八重樫 理人 ，高山 朝陽 ，矢部 智暉 ，竹下 裕也 ，永冨 太一 ，遠山 敬久 ，田中 晶 ，髙島 知之 ，小野坂 裕美 ，吉見 晃裕	4．巻 2
2．論文標題 防犯ウォーキングアプリ「歩いてミイマイ」を用いた地域安全マップ作成活動の課題と可能性 ： 大学生を対象とした調査から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保 智生 ，皿谷 陽子 ，尾崎 祐士 ，田中 晶 ，髙島 知之 ，小野坂 裕美 ，吉見 晃裕	4．巻 25
2．論文標題 安全安心まちづくり推進店舗における万引き防止教育の実践 店員の防犯意識とホスピタリティに注目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣澤 愛子 ，笹原 未来 ，大西 将史 ，織田 安沙美 ，鈴木 静香	4．巻 45
2．論文標題 大学－小・中学校－教育委員会の連携による ：「いじめ・学級崩壊・不登校」を予防する持続可能な学校支援システムの構築とその効果検証	5．発行年 2021年
3．雑誌名 福井大学教育実践研究	6．最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田利郎	4．巻 211
2．論文標題 インターネットを介した子どもと「性」の出会い（子どものこころとインターネット）-- (家庭や学校は、子どもにインターネットをどう教えるか)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田 利郎	4．巻 49
2．論文標題 中学校・特別活動におけるゲーム障害・インターネット依存を題材とした継続的な授業実践	5．発行年 2020年
3．雑誌名 コンピュータ&エデュケーション	6．最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田利郎 ，白濱成希 ，森幸男 ，中谷直史 ，塚本博之 ，松本有二 ，渡邉志	4．巻 21（5）
2．論文標題 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度におけるVisual Analog Scaleの応用	5．発行年 2019年
3．雑誌名 バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌	6．最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴田利郎 ，石川久美子	4．巻 47
2．論文標題 高等学校における教科横断的なインターネット依存改善のための授業実践	5．発行年 2019年
3．雑誌名 コンピュータ&エデュケーション	6．最初と最後の頁 65-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西薫 ，大西将史	4．巻 51
2．論文標題 現代日本社会における待機児童問題と多様化する保育の必要性 ： ベビーホテル利用者の調査へ向けた課題整理	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要	6．最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保智生 ，皿谷陽子	4．巻 30
2．論文標題 店員のホスピタリティと防犯意識の検討 ： スーパーマーケットでの万引き防止の観点から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Hospitality ： 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌	6．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲垣良介 ，岸俊行	4．巻 35（2）
2．論文標題 学校体育における水難事故の未然防止に資する指導内容に関する検討 ： 海水浴場の旗に対する認識を調査して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 体育科教育学研究	6．最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岸俊行	4．巻 4
2．論文標題 教育現場において看護学生が教師に対して抱く信頼感の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6．最初と最後の頁 197-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 渡邉 泰典，稲垣 良介，森山 進一郎
2．発表標題 河川での水難における行動選択の違いが水難者の深部体温に及ぼす影響
3．学会等名 日本水泳・水中運動学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 岡田 有司，大久保 智生，半澤 礼之，南 雅則，千島 雄太，Hou Yuejiang，小泉 令三，平石 賢二
2．発表標題 学校適応はどのようにとらえられるのか（14）
3．学会等名 日本教育心理学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 稲垣 良介，岸 俊行，渡邊 泰典，江田 廉
２．発表標題 ライフジャケットを用いた実習授業が児童の水難時の行動選択に関する判断に及ぼす影響
３．学会等名 日本体育科教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 都築 麗緒奈，稲垣 良介
２．発表標題 子どもの水辺安全に関する学生の学び‐吉川優子さんのご講演を通して‐
３．学会等名 子ども安全学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 江田 蓮，稲垣 良介
２．発表標題 「着衣のまま水に落ちた場合の対処」の授業が児童の水難時の行動選択の意識に及ぼす影響
３．学会等名 子ども安全学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 稲垣 良介，松本 貴行， 吉川 優子
２．発表標題 保護者に対する「水辺の活動に関するアンケート調査」報告‐学校水泳の内容及びライフジャケット教育に着目して‐
３．学会等名 子ども安全学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 稲垣 良介、岸 俊行、長谷川 晃一
２．発表標題 河川での実習及び教室での水泳の事故防止の心得の授業の効果の検証
３．学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大久保 智生，金澤 潤一郎
２．発表標題 小学生を対象とした万引き防止教育プログラムの開発（1）
３．学会等名 感情心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金綱 知征、西野 泰代、戸田 有一、鶴田 利郎、羽鳥 晋
２．発表標題 「いじめ免疫プログラム」の評価指標の開発と評価実践
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 半澤 礼之，大久保 智生，岡田 有司，水野 雅之，荒木 史代，田澤 実，西垣 順子
２．発表標題 学校適応はどのようにとらえられるのか（12）
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡田 有司、大久保 智生、半澤 礼之、鈴木 美樹江、Hou Yuejiang、浅井 継悟、都筑 学
２．発表標題 学校適応はどのようにとらえられるのか（13）
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 稲垣 良介
２．発表標題 着衣のまま水に落ちた場合の対処の実習が児童の 水難事故に対する認知に及ぼす影響 ：予防行動の意図に影響を及ぼす要因に着目して
３．学会等名 スポーツ教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大久保 智生
２．発表標題 交通安全マップ作成活動の教育効果の検証（2）:ヒヤリハットおよびキーワードによるマップ作成活動の比較検討
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口 雄人，桐生 正幸，大久保 智生
２．発表標題 個人レベルのソーシャルキャピタルが防犯態度・地域愛着へ与える影響についての検討
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 稲垣 良介，岸 俊行，佐藤 善人
２．発表標題 「『水遊び』及び『水泳運動』の心得」の指導内容に関する基礎的検討（第二報） －地域特性別にみる児童の内容項目別の理解の多寡－
３．学会等名 日本体育科教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ryosuke INAGAKI, Toshiyuki KISHI, Shoji ISHIGAMI, Yasunori WATANABE
２．発表標題 Effects of lessons on students' perception of waterside accident prevention behavior ： Practice by lecture and practical training in the gymnasium
３．学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference
４．発表年 2020年

１．発表者名 大久保智生 ，有馬道久 ，野中陽一朗 ，町岳 ，岸俊行 ，富田英司
２．発表標題 教師の授業マネージメントを考える
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大久保 智生
２．発表標題 小学生の問題行動の規定要因:－家庭環境，個人の特性，友人環境，学校生活による影響の検討－
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 島田 貴仁，平 伸二，原田 章，金政 祐司，大久保 智生，樋口 匡貴
２．発表標題 地域での犯罪予防：実務家との協働とオープンデータによる新たな教育研究の可能性（1）
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大久保 智生 ，高山 朝陽
２．発表標題 地域安全マップを作成可能な防犯ウォーキングアプリの開発(3):大学生の自由記述の分析に基づいたICT活用の意義と課題の検討
３．学会等名 日本青年心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 森山 進一郎，佐藤 悠太郎，豊田 郁豪，渡邉 泰典，稲垣 良介
２．発表標題 わずか４日間で児童に背泳ぎで泳がせる指導法の開発
３．学会等名 スポーツ教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲垣良介
２．発表標題 地域河川における水難事故防止学習が中学生の予防行動の意図に及ぼす影響
３．学会等名 スポーツ教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲垣良介 ，岸俊行
２．発表標題 ライフジャケットを用いた着衣泳の授業が中学生の水難事故の未然防止に資する認識に及ぼす効果
３．学会等名 教育医学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲垣良介 ，岸俊行 ，佐藤善人
２．発表標題 「『水遊び』及び『水泳運動』の心得」の指導内容に関する基礎的検討(第一報):地域特性別にみる児童の水辺活動実態
３．学会等名 日本体育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸俊行
２．発表標題 乳幼児・児童虐待の特徴に関する基礎的分析
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 日本水泳連盟	４．発行年 2019年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 286
３．書名 水泳指導教本　三訂版	

1．著者名 時岡　晴美、大久保　智生、岡田　涼	4．発行年 2022年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 212
3．書名 地域・学校の協働が醸成する「まちづくりマインド」	

1．著者名 時岡　晴美、大久保　智生、岡田　涼、平田　俊治	4．発行年 2021年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 216
3．書名 地域と協働する学校	

1．著者名 鈴木秀人・山本理人・杉山哲司・佐藤善人・編著	4．発行年 2021年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 336
3．書名 小学校の体育授業づくり入門第6版	

1．著者名 時岡　晴美、大久保　智生、岡田　涼	4．発行年 2022年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 212
3．書名 地域・学校の協働が醸成する「まちづくりマインド」	

１．著者名 鶴田利郎，竹内和雄	４．発行年 2020年
２．出版社 学事出版	５．総ページ数 152
３．書名 第2章 個別の課題から実態と対応を探る Ⅱスマホ問題とインターネット依存 ： 阪根健二 （編著） 生徒指導のリスクマネジメント	

１．著者名 岸俊行，安彦智史，西畑敏秀	４．発行年 2020年
２．出版社 三恵社	５．総ページ数 107
３．書名 NETWALKER 危険がいっぱい！情報化社会を歩く	

１．著者名 大久保智生	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 192
３．書名 学校に還す心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大西　将史 (Ohnishi Masafumi) (20568498)	福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・准教授 (13401)	
研究分担者	稲垣　良介 (Inagaki Ryousuke) (20583058)	岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授 (33704)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鶴田　利郎 (Tsuruta Toshirou) (20735352)	国際医療福祉大学・小田原保健医療学部・講師 (32206)	
研究分担者	大久保　智生 (Ohkubo Tomoo) (30432777)	香川大学・教育学部・准教授 (16201)	
研究分担者	杉山　晋平 (Sugiyama Shinpei) (30611769)	天理大学・人間学部・准教授 (34602)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関